東浦

浅井善太郎

東浦という地名は、昭和三十年一月敦賀郡の東浦・東郷・中郷・愛発・粟野の五ケ村全部が敦賀市に合併して以来なくなつてしまつた。この地名は明治二十二年町村制実施によつて東浦村という村名で誕生したのである。それ以前から敦賀湾の東海岸を東浦と呼び、西海岸を西浦と呼んだものと思われる。西海岸―敦賀湾を抱く立石半島の湾に面した沿岸は、松原村時代も、昭和十二年四月敦賀市制が敷かれて市に合併されてから後も、通称、西浦と呼んでいる。それでは町村制実施以前から敦賀湾の東海岸を東浦と呼んだか、呼ばなかつたならば、何という地名であつたかを調べてみよう。当地方江良の刀根文書（刀根春次郎氏蔵）に、慶長二年二月の塩年貢納の文書の終りに署名してある刀根の右肩に、ひかしのかわ江良と書かれてある。慶長といえば、関ケ原合戦の頃で、今から約三六〇年前、すでに敦賀湾の東の側・西の側という通称があつたのである。

この敦賀湾の東海岸の地誌について、詳細に調査してみようと思つて現在まで四十年間こつこつと資料を集めているが、なんぼ範囲を狭くして調査しても際限がない。しかし、この範囲を狭くして詳細に調査して、学者達の研究に供する仕事が、また大変大事なことでないかと思う。郷土を愛好する郷土史家が、その土地、その土地に出て、この学者達の下積みの仕事をすることが大切であることはぜい言を要しないことである。

東浦地方の有史以前のこと、有史以後のこと、即ち、記・紀・万葉集時代の製塩、気比神宮との関係、朝鮮を始め対岸との交渉、金ケ崎合戦及び気比神宮の活躍、越前一揆、秀吉征韓の舟役、鞠山藩、伊能忠敬の沿岸測量、仏教の弘通、移民等々取上げてみると以外に書くことが多い。それから、これらに関連する伝説・民謡など民俗の方面を探訪採集すると中々の数にのぼる。

このうち、まず製塩について書いてみる。私がこんな仕事をはじめた動機について、当時の記憶を辿つてみよう。私の出生

浅井　東浦

地は五幡で、やはり東浦の地域内、六十戸余りの農漁村で、うち漁家は二三軒である。

私が高等小学を出て青年団に仲間入りした頃、大正の初め、同志がよつて、「螢雪」というこんにやく版刷の同人誌を創めた。私の郷土史を調べてみようと思つたのはこの頃からで、その頃、敦賀高等小学校長福島治三郎さんの作詞された「敦賀唱歌」が学校で教えられ、盛んに歌つたものだ。その歌詞の中に、「鷗が崎に打出でて、見渡ず右は田結浦、塩焼く烟五幡の、いつまで見てか帰る山」というところがあつたことを記憶している。

この田結・五幡の製塩は明治になつても続けられ、田結は明治二十七年に廃止したが、五幡は明治四十年塩専売法によつて廃止されることになつた。私の尋常二年まで製塩されていたので、塩浜へ見に行つたことを覚えている。塩浜の所々に砂が堆く積まれてあつたこと、大きな桶の上に真竹のすのこを敷き、塩のついている砂を山盛りに積んで、上から海水をかけ、濃縮した食塩水を下の桶に溜める。

その濃縮した食塩水を塩釜の大鍋に入れて塩に結晶するまで、火で焚きつめる。この塩釜を造るのに蜆の貝殻をつかつたときいているが、明治になつて藩時代の代官であつた五幡宮松吉太夫の土蔵をこわした時、床下から蜆の貝殻の出たこと記憶している。

田結・五幡は、日本最古の歌集に角鹿・手結・伊都波多の文字で敦賀と共に詠まれており、奈良朝時代、またそれ以前から敦賀の塩として、天皇の御料として珍重されたことは、万葉集巻十二寄物陳思一五〇首の中に

大王の塩焼く海人の藤衣穢るとはすれどいやめづらしも（二九七一）

詠まていることでも明らかである。大王の塩と銘打たれるまで敦賀の塩が珍重されるにいたつたについては日本書紀巻十六武烈天皇の所に書かれてあるからこゝでは略することにする。次に敦賀地方の製塩史の年表を掲げる。

文保二年三月　若狭三方郡日向浦中大郎大夫手浦に塩釜を立つ。

永正九年　大比田浦刀祢塩年貢について訴う。

塩浜は東西沿海各浦（今浜村を除く）にありて製塩す。

泉村、二村は当時代の中世より船囲い又は材木置場に使用し製塩す。

東西沿海の塩浜大破す。

宝暦九年十一月廿一日　大比田浦塩浜悉流失し、同浦これより製塩を廃す。

文化年中　阿曽・杉津・横浜製塩廃止

明治初年　江良製塩廃止

明治五年　田結製塩廃止

明治二十七年　赤崎製塩廃止

明治三十八年　五幡製塩廃止

明治四十年

（敦賀郡誌抄出）

角鹿の塩というのは、田結・五幡は勿論のこと敦賀湾内津々浦々の製塩ことをさしていると思う。こゝで蛇足と思うが、万葉集巻三に敦賀港から舟出して、沖合から田結浦の製塩を詠んだ笠金村と田結浦について書いてみよう。

笠金村の伝記については詳かにわかつていない。武人であつたこと、伝記のない所から推して六位以下の身分の人であつたにちがいない。笠金村歌集を残している所か

ら考えると、万葉歌人でも出色のもので、柿本人麿・大伴家持の中間を華かならしめた歌人で、伝説はないが、沙弥満誓・笠女郎と同族だろうし、敦賀へ来ている所から推して、気比神宮に関係のある吉備津彦命の子孫鴨別命の子笠朝臣その人か、または笠朝臣に関係ある人ではないか。」

田結浦については、田結千軒という伝説もある位で、万葉時代から奈良時代・平安時代は相当栄えて、一時は戸数千戸もあつたように伝えている。現在は西本願寺末興隆寺一ケ寺になつているが、これも前身は真言宗であつたらしく、寺歴には准如上人の時、興隆寺住職正堅が帰依している。現在、地名に寺院関係のものが多く、天台宗寺院趾の浄泉坊、曹洞宗吉祥院趾の小久保、その他浄念谷・院山等がある。神社関係では式内社田結神社が鎮座している。

この田結の地名については手結とあつて、手結とは環のこと、釧のことで、昔、手にまといかぶせた玉で飾つた美しい装身具で、これを妻の土産にしたものらしい。又、弓を射るにつかつたともいつている。小手・弓籠手をいゝ、鞆といつて、皮革で作り左の臂に着けて弓を射た。この鞆が弓を射る度にうなりをたてゝ音を出したから、「丈夫の鞆の音すなり」といゝ、丈夫が手結の枕詞になつたのもこの鞆かららしい。また、村などで、手間がわり、であいということを、ゆい又はいといつて田仕事の忙しい時にお互が手伝し合うことで、仕事の能率をあげる上に考えた、共同作業の一形式である。

万葉集巻十四東歌（三五四九）にも多由比潟の地名が出ている。本州西部には敦賀の田結以外に三方郡三方町に田井―ここには式内社多由比神社が鎮座している。それから、京都府加佐郡東大浦村田井（以下昭和二十八年十月一日町村合併促進法施行以前のもの）、同与謝郡栗田村田井、兵庫県城崎郡今港村田結、長崎県北高来郡田結村などあつて、いずれも地名伝説があると思うが、田結・田井・田居いずれも田所であることにまちがいない。

次に敦賀の塩の販路について書く。

角鹿の塩が天皇の御料として大和地方の皇都に運ばれた道筋は、古事記の中に詠まれている応神天皇御製の「角鹿の蟹」に詠み込まれている道筋と同じにちがいないと思う。角鹿の津から陸路を琵琶湖の北岸塩津に運ばれ、こゝから湖上を通つて南岸の大津に陸上げされ、更に陸路を山科・石田・木幡・宇治・久世・井手・棚倉・樺田・木津・奈良坂を経て平城京に入つたのであろう。塩津の名は、角鹿の塩が京に運ばれるのに必ず通過したので命名されたものと思う。近くの塩津山の名も万葉集に笠金村などが立派な歌を詠んでいるが、やはり角鹿の塩にゆかりあるにちがいない。

更に角鹿の塩の販路をこまかく調べてみると、西江州海津方面は敦賀から疋田・駄口・山中の愛発山越えて運ばれ、塩津方面は麻生口・新道野から運ばれたのだろう。

田結・五幡の塩は、田結は越坂越えに、五幡は田尻越に、旧東郷村樫曲と、獺河内の中間獺谷から池河内に出て、池河内から刀根・柳瀬へ、又、中河内へ運ばれたらしい。元亀二年卯月十二日の刀根文書に、獺谷道を通つた土地の塩商人と、江州塩商人が同心か否かを江良・五幡・上野（挙野のこと）の庄屋に葉原増福寺住職が、朝倉勢からの命で糺してきている。

当時牛に塩をつけて峠を越えた馬子唄が今に残つている。

七ツ下がれば駄賃牛や戻る、中にやわた

浅井　東浦

しの殿もいる。
七ツ時には駄賃牛や戻る、牛を待たねど殿を待つ。
馬にや沓はかし我身はわらじ、そうすりや日暮になるわいな。
馬は戻るしやせ子は泣くし、柴は生柴鍋や洩れる。
馬は豆や好き馬子は酒がすき、乗つた中乗りや唄が好き。
なお、木芽峠開さく後、木芽峠越えた板取から中河内に、板取から今庄に運ばれたらしい。

杉津・横浜・比田（大比田・元比田）の塩は菅谷越に瓜生野から大塩（王子保）に運ばれたようだ。

この塩の販路を裏付けする伝説がいくつかあるが、そのうち一二を紹介しよう。

昔、元比田の旧家大友源左ヱ門の御曹子茂平が放蕩者で、郷里元比田をとびだして、この下温谷に住みついた。その昔から、大塩の地名の示す如く、比田・横浜・杉津の製塩が、元比田から山越えに菅谷・瓜生野に出て、大塩谷で塩市を立てた。すでに昔から敦賀湾東岸のこの地方と大塩谷と交渉が塩によつて開かれ、人の往来も盛んになつた。現在おもや大友茂平、分家大友源左ヱ門、その分家の源次郎・源四郎がある。源左ヱ門当主の話によると、今から約七五〇年前山伏姿でこの地に移住して、村の草分けとなつたと伝えている。その後、子孫繁栄して白崎町に六・七軒、広瀬に一軒あるという。下温谷では大友家は九州大友宗麟の末裔と伝え、附近に大友家にからまる伝説がいくつか残つている。

次に五幡の塩が江州に売り出された塩商人に関係ある伝説を一つ。五幡の金光山西勝寺の阿陀如来は「身替りの本尊」と申して名高く、褒文子・芥子国父子が泉州春日山を中にしてその寸法を定めないで半身づゝ刻んで双方持寄り合せたところ、寸分たがわず合体したという。もとこの本尊は江州池原の大伽藍の本尊であつたが伽藍は兵火にやかれてさゝやかな草堂に安置されていた。天正十一年賤ケ岳の合戦に、羽柴・柴田の両軍が入乱れて戦つた時、中川清秀の家来今村某が敵に追われて余呉湖近くをさ迷い、絶対絶命今は叶わじと近くの草堂にとびこび、今はたゞ即心往生と本尊に向つて一心に念仏していた。後をつけてきた敵が、念仏三昧の今村の背後から真二つに太刀をあびせて出ていつた。今村はハッと思つた瞬間、放心の状態から正気づくと、確かに切られたはずの我に傷一つうけていない。これは不思議と本尊を拝すると、本尊は勿体なくも真二つになつている。さては日頃仏を信ずる自分の心が仏に通じたのだろう。勿体ない、有難いと、感涙にむせんで仏体を合わせまいらせると、ぴたつと合体して元のまゝの仏となつた。今村はすぐ発心してこの堂守となつて一生をさゝげた。これからこの仏を「身替りの本尊」と称えて各地から参る者が後をたゝなかつたという。

その頃五幡に与左ヱ門という勤勉家で正直者が塩商人として江州へ往き来した。烏の鳴かぬ日はあつてもこの男が行商を休むことはなかつた。ところが行商の旅空で不幸にも病気にかゝつた。身寄りのない旅空で病気にかかつた程悲しいことはない。家に帰ることもできず、便りすらできぬ我身の不幸を悲しんだ。だんだん病気は重くなつてこのまゝ他国の土となるようなことになつてはと、ひとり悲しんだが、所詮この世は夢の世、今は永い未来を助かりたいと一心に草堂にやすませてもらつてこの阿

弥陀如来を一心に拝んだ。こうして三日三夜仏を念じたその夜、不思議や、本尊から金色の後光がさし、願かなつて全快することができた。それから後も行商をつづけ、この草堂の前を通る毎にお礼参りして信心こめた。お陰で家も栄え暮しも楽になつてきた。これも阿弥陀如来の御守りと住職に懇願して、この仏をお請けして故郷にお寺を立てようと誓つた。住職もこの塩売の始終を聞き、年来のまごころに感じて本尊を譲与した。塩売の喜びは大変なもので、早速仏を塩菰に包み背負つて故郷をさして帰つて来た。ところがそれを知つた村人達は、この霊験あらたかな阿弥陀如来を他国人に譲れるものかと取返す為に追かけてきた。そしてとうとう旧愛発村の刀根まできて追ついた。

そして川の近くで尊像の奪い合いが始まつた。その時一天にわかにかき曇つて雷鳴と共に盆を覆すような大雨になつた。やがて河川は氾濫して出水するさわぎ。どちらも川に落ちて川の中で必死の尊像の奪い合い。そのうち尊像を濁流に取落してしまつた。両人はしばらく茫然としていたが、せん方なく追手は池原さして帰途につき、塩売も川筋を仏像をたずねながら敦賀まできたが仏像は見つからない。塩売はがつかりして帰途につき田結浜まで来ると、上品な白眉の老僧が路傍の石に腰かけて休んでいられる。そして「私は旅僧であるが、帰山をたずねてこゝまできたが、今は足も痛んで歩けない。私を連れていつてくれまいか」と、申されるので、背負つたのにとても軽いので、不思議に思つて後をふり向くと、旅僧ではなくて、先に流れに落した阿弥陀如来である。塩売は不思議な機縁にすつかり感激して村に帰り、一伍一什を村人に話して寺を建てこの仏像を安置した。

（筆者は元小学校長、）